

後宮炎巫伝

～巻き戻り巫女は死の謎を解く～

深水えいな Eina Fukami



アルファボリス文庫

序章

落葉舞う、ある晴れた晩秋の日。鱗雲の薄くかかる澄んだ空に、重苦しい役人の声が響いた。

「これから罪人の処刑を行う」

処刑場となる広場には、溢れんばかりの野次馬が集まっていた。

ある者は好奇心に満ちた瞳で、またある者は眉をひそめ、今か今かと罪人の登場を待ちわびている。

役人に引きずられるようにして現れたのは、わずか十六歳の巫女・紅明琳^{ホンメイリン}。

白い薄衣を身にまとい、縄で両手を後ろに縛られた明琳は、表情一つ動かすことなく、静かに処刑台へと歩を進めていた。

栄養不足で霞んだ目に、骨と皮ばかりのやせ細った手足。自慢だった長い紅髪^{あかがみ}も、今では枯草のように傷み乾燥しきっている。

「可哀想に、あんなに若いのに」

「何でも腕の立つ巫女だったそうじゃないか」
「でもしょうがないさ。皇后陛下の暗殺に加担したのだろう？ 死罪となるのも当然のことさ」

ざわめく群衆を鎮めるように、役人が仰々しい声で訴状を読み上げる。

「皆の者！ この者は、偽りの予言で皇后陛下を文仙廟へと誘い出し、妖魔に襲わせ暗殺した大罪人である。——その罪、死罪に値する！」

群衆が息を呑んで見守っていると、斧を持った処刑人が現れた。

明琳は顔を上げる。高天の空に蜻蛉がゆつくりと飛んでいくところだった。彼女はほんやりとした意識の中で考える。

（ああ……今回も駄目だったわね。一体何度この人生をやり直せば正解に辿り着けるのかしら）

やがて処刑人がゆつくりと斧を明琳の首に振り下ろす。骨を断ち切る鈍い音。少女は悲鳴一つ上げなかった。

風が処刑台を吹き抜け、秋の空を泳ぐように、紅い蜻蛉がひらりと舞い飛ぶ。

こうして紅明琳の人生はわずか十六年で幕を閉じ、その名は誰にも語られることなく、歴史の闇へと葬り去られた。

——かと思われた。

第一章 明琳のやり直し人生

「……ん」

明琳は頬に当たる冷たい石の感触で目を覚ました。

大きな赤褐色の瞳を見開き辺りを見回すと、磨き抜かれた白い大理石の床と白い漆喰の壁が見えた。

四方には朱雀の彫られた金の柱。部屋中央には黒い漆塗りの椅子がぽつんと一つ置かれている他に、家具や調度品などは何もない。

不気味なほどに静まり返った部屋の中で、明琳は身震いをした。

ここは一体どこなのだろう。自分は確かに処刑されたはずなのに、なぜ生きているのだろう。

明琳の頭を疑問が埋めつくしたその時、低い男の声が大理石の床に反射し響いてきた。

「やり直したいか？」

警戒しながらも、明琳は声のした後方へとゆつくりと振り返った。

立っていたのは一人の背の高い男だった。

歳の頃は二十歳程だろうか。彫刻のように整った鼻と輪郭に、切れ長の紅い瞳。真紅の袍に身を包んだ男はまるでこの世のものではないかのように美しい。

何より目を引いたのは、彼の髪だった。腰までの長い髪は、金から赤へと色を変え、炎のような不思議な揺らめきを放っている。

一体彼は誰なのだろう。

明琳の目に映る男は、彼女が今まで見た中で一番美しい人だった。だが同時に、人間離れした恐ろしさ——畏怖の念も感じさせる。

身をすくませる明琳に、男はそっと手を差しのべ、再度問いかけた。

「私の名は天翼^{テンイ}。紅明琳、お前はこの生をやり直したいか？」

人生を……やり直す？

「そんなことできるの？」

目を見開き、恐る恐る問いかける明琳に、天翼は表情一つ動かさずにうなずいた。

「ああ。今回は特別だ。お前にはこの国を統べる巫女——炎巫^{エンフ}になるという天命があるからだ」

炎巫というのは、ここ南夏国^{ナンシャ}で最高位の巫女のことだ。

そして天翼によると、明琳はその炎巫になる命運^{さだめ}なのだという。

実際、明琳は炎巫を選ぶための考試に挑み、最終候補にまで残っていた。

しかし最終的には炎巫には別の巫女が選ばれ、明琳は謂^{いわ}れのない罪で処刑されてしまった。それが間違이었다としても言うのだろうか。

「でも本当に私が炎巫になる運命なら、どうして私は処刑されたの」

明琳としてはもっともな疑問を口にしたのだが、天翼は無表情に答えた。

「それは、何者かによる謀略としか言いようがない」

「そんな」

一体誰が何のために自分を罠にかけ処刑したというのだろうか。

明琳が下を向いて考えこんでいると、天翼が再び口を開く。

「私とて本来ならばこんな面倒なことはしたくないが、国の一大事だ。お前には炎巫になってもらわなくてはならない」

「一大事？」

「ああ。本来、炎巫になるべき者が死に、炎巫になるべきでない者が炎巫になった。

これは国が減んでもおかしくない一大事だ」

「滅びるだなんてそんな大袈裟な」

自分が死んだ程度でこの国の命運が変わるなどとは、明琳にはわかには信じがたかった。

なおも半信半疑の明琳の額に、天翼がそっと人差し指を当てた。

「嘘だと思うのなら、見てみればいい」

瞬間、明琳の頭の中に走馬灯のように映像が流れ込んでくる。

映し出されたのは、相次ぐ地震や火山の噴火、干ばつによって荒廃した大地。瘦せ細り、飢えや病に苦しむ人々。

「これが、お前が死んだ後の南夏国だ」

「嘘。あんなに豊かな国だったのに」

南夏国は、周辺国に比べても気候が温暖で土壌も肥沃なことで知られている。農作物や魚がたくさん採れ、豊かな国だった。それなのに――。

「炎巫がおらず、国の舵取りが上手くないっていいところなのだ」

天翼が無情にも告げる。

炎巫には国の行く末を占い、皇帝に助言するという重要な責務がある。

つまり炎巫になれば国を動かせる。

それだけに炎巫の器を持つ者がその座につかなければ国が乱れてしまうのだ。

明琳は愕然とした。

まさか自分が死んだというだけで、国がこんなにも乱れるなんて思いもしなかった。考えたくはないが、この様子だと故郷も無事では済まないだろう。

「それだけではない。お前が処刑されればお前の家族にも被害が及ぶのだ」

次に映し出されたのは、罪人の家族として迫害を受ける両親や姉の姿だった。

「そんな」

感情の処理が追いつかず、明琳がじっと白い床を見つめていると、天翼がはっきりとした口調で言った。

「説明が終わったのでもう一度問う。明琳、お前はこの生をやり直したいか？」

明琳はぐくりと唾を飲み込むと、迷わずにその手を取った。

「ええ。このまま国が減びたり、故郷の村や家族に迷惑をかけたりするのを黙って見ているわけにはいかないわ」

明琳の力強い口調に、燃え盛るような意志の強い瞳に、天翼の唇が薄い笑みを作る。「ならば誓え。この私を契属にすると」

契属とは、霊的存在の者を契約獣や守護霊にするということだ。

「それは別に構わないのだけれど――」

天翼の提案に、明琳は戸惑った。目の前の男を契属にするのは構わないが、一体どのようにすればよいのだろう。

明琳が必死に古い文献に書かれていた契約の仕方を思い出していると、不意に天翼は明琳の足元にひざまずいた。

「本当によいのだな？」

上目遣いに明琳を見つめてくる、血に濡れたような赤い瞳。

明琳が瞳を見つめ返してうなずくと、天翼はおもむろに明琳の左手を取り、薬指の根元に口づけた。

瞬間、炎にも似た真つ赤な光が辺りを包む。

部屋の方が崩れ、紅の羽根が空中を舞い始める。

「眩し……」

目もくらむような光の中、明琳は不思議な音を聞いた。

それは、止まっただけの運命の輪が再び動き出す、胎動にも似た懐かしい音だった。

＊

「皆の者、囲め！」

燃えるような朱い長袍あか うわぎを揺らめかせ、一人の老婆が叫んだ。

彼女の名は暁蓮ギョウレン。この国を守る巫女の中でも最上位の存在——炎巫と呼ばれる人物である。

目の前には黒く凶暴な邪竜が、村を守るために張った結界を今にも突破せんと暴れ

狂っている。

「ふん、やけに生きのいい蜥蜴としかげだね。でもこれで終わりさ」

暁蓮は右手に持った金色の錫杖を高く掲げた。柄に付いている赤い宝玉がからりと高い音を立てて揺れる。

「炎波！」

暁蓮の声と共に、錫杖から紅蓮の炎がうねりを上げて噴き出した。

炎はまるで荒れ狂う大河のように広がり、唸りを上げながら邪竜へと襲いかかっていく。

「グオオオ」

竜は地響きのような咆哮を上げたが、神聖なる火に焼かれ、その力は次第に失われていく。

やがて炎が静まると、竜は姿を消し、空には澄んだ光だけが残った。

暁蓮の衣が、舞い上がった熱風にたなびいた。

「終わったね」

暁蓮が静かに告げると、彼女の連れの巫女や兵士たちは感嘆の息を漏らした。

「すごいわ」

「さすがは炎巫様！」

「炎巫様、ありがとうございます」

村人たちが次々と感謝と賛辞の声とともに集まってくる。

だが暁蓮は顔色一つ変えずに村人たちを一瞥しただけだった。

「なに、炎巫として当然のことをしたまでさ」

そう言うのと、暁蓮はわき目もふらず馬車に乗りこんだ。

炎巫というのはこの国最高位の巫女のことだ。

今回のような妖魔退治だけではなく、疫病退散の祈祷、雨乞いの儀式に、皇帝への助言まで、業務は多岐にわたっている。

「それにしても疲れたね」

暁蓮はどっかりと椅子に座りこんだ。

暁蓮は今年で八十二になる。

並の年寄より遥かに体力も気力もある彼女だったが、はるばる北方への遠征の疲れに加え、巨大な邪竜を焼き払う炎に霊力を消耗し、疲れは極限に達していた。

「少し休むよ」

ふちよう ウェンフレン

暁蓮は巫長の文芬にそう告げると、ゆっくりと目を閉じた。

「どうぞゆっくりとお休みください」

文芬が暁蓮に氣を使いその場から離れようとする、暁蓮は目を閉じたままうわご

とのように話し始めた。

「私ももう年だし、もう長くもないかもしれない。いいかい、文芬、もしもその時が来たらお前が新しい炎巫を探しておくれ。見れば一目で分かるはずだ。新しい炎巫は赤い髪で燃え盛る瞳を持っている。それから——」

だがその言葉を文芬は慌てて遮った。

「嫌ですわ、縁起でもない。暁蓮様には頑張って百歳まで炎巫を続けてもらいますからね」

そう言うって暁蓮をたしなめる文芬。

「百歳まで？ そいつは勘弁だね」

暁蓮は薄目を開け苦笑すると、再び臉を下ろした。

それを見た文芬は、暁蓮がほんの少しだけ休むつもりなのだろうと考えていた。ほんの少しだけ仮眠を取れば彼女の体力も回復できるだろうと。

——だが暁蓮の瞳は、その後二度と開くことはなかった。

*

「まあ、なんてこと」

居間にいた母親が小さく叫んだのを聞き、明琳は顔を上げた。
「どうしたの、お母様」

明琳が縫いかけの布を膝に置いたまま問うと、母親は大きく目を見開き、眉を寄せて王都から届いた知らせを明琳に見せた。

「暁蓮様が亡くなられたそうよ。それで次の炎巫様を決める考試を行うから、明琳もそれに参加してほしいのですって！」

明琳の心臓がどくりと大きな音を立てる。いよいよ、運命の輪が回り出す時が来たようだ。

「そ、そうなの」

明琳が曖昧に返事をする、明琳の父親が書き物をしていた手を止め、眉を寄せた。
「考試？ 明琳が？ 新しい炎巫は前の炎巫からの指名で決まるのではなかったのか」

その声には驚きの中にどこか不安げな響きが混じっている。

「それが、指名がないまま急に亡くなられたって」

母親は小さく息を吞むと、便りを父親に手渡した。父親は皺の刻まれた手でその紙を広げ、細かい字を追いつながら唸る。

「へえ、珍しいこともあるものだ。なあ、明琳」

急に名前を呼ばれ、明琳は背筋を伸ばして顔を上げた。

「え、ええ。そうね」

明琳は無理やり驚いた顔を作ってみせた。

だが——彼女の胸の奥には違う感情が渦巻いていた。

父親はその微妙な変化を見逃さず、目を細める。

「……そんなに驚いていないようだな。まさかこのことを予知できていたのか？」

「ええ……まあ」

明琳は慌てて父親から視線を逸らした。冷や汗がこめかみを伝う。

確かに、明琳はこの辺りでは右に出る者はいないほど優秀な巫女として名をはせ、占いにも長けていた。

だが暁蓮の死を予知していたわけではなかった。単に知っていたただけだ。

「まあ、すごいわ、明琳」

母親は娘の肩に手を置き、目を潤ませる。

「ひょっとしたら次の炎巫は明琳かもしれないぞ」

父親も口元をほころばせる。その瞳には無邪気な期待が満ちていた。

両親が顔を見合わせ、喜び合う光景。

それを見つめる明琳は、そっと口元を引き結んだ。胸の奥で重苦しい感情がわき上

がつてくるのを必死で抑える。

「……それじゃ私、外に干した薬草の様子を見てくるから」

笑みを浮かべたまま頭を下げ、明琳は竹かごを背負い、戸口を出た。

外は秋の風が吹き、干した薬草がさらさらと音を立てて揺れていた。

明琳は小さく息を吐く。

（次の炎巫になる……ね）

だがその道のりが決して容易でないことは、他ならぬ明琳自身がよく知っていた。

「明琳ちゃん！」

明琳が家の前で身をかがめ、山で摘んだ薬草を干していると、道の向こうから一人の老人が声をかけてきた。

「張伯伯、どうなさったのですか？」

明琳が顔を上げると、張伯伯は目じりを下げた。

「いやあ、明琳ちゃんの薬のおかげで腰がすっかりよくなったから、お礼を言いたくて。ありがとう」

「いえ、お役に立てたようで何よりです」

明琳がぺこりと頭を下げ、腰の回復を喜んでいると、今度は道向こうから幼い子供を連れた母親がやって来た。

「明琳さま、子供が擦りむいて怪我をしまいました」

明琳は泣きじゃくる子供の傍らに膝をつくと、血のにじむ足にそっと手を当てた。

太陽のような暖かな光が迎りを包み、子供の怪我はたちどころに綺麗に消え去った。

「明琳さま、ありがとうございます！」

母親が感謝の言葉を述べると、明琳の周りには次々と村人たちが押し寄せてきた。

「明琳さま、夫が漁に出るので、どうかご加護を」

「明琳さま、今年は豊作になるでしょうか？」

「明琳さま、畑に妖魔が出たと聞きました、退治してください」

明琳はそれらの依頼を順番に聞き、村人たちの要望に一つ一つ丁寧に答えていった。薬草作りにお守り作り。安産祈願に豊作かどうかの占い。

そして最後に、明琳は妖魔が出るといふ畑に行き、深呼吸をして迎いを見回した。

（妖魔は——いた）

明琳は目の端に黒くうごめく影を確認するや否や、無駄の一切ない慣れた動きで畦道の一角に向かって掌を掲げた。

「炎矢」

瞬間、雑草の陰にいた蛙の妖魔が真っ赤な炎を上げて燃え上がる。

「これで最後ね」

明琳は額に浮いた玉のような汗をぬぐった。辺りを見回すと、すでに真つ赤な夕日
が畦道を染め上げている。

明琳はそつと息を吐き出すと、茜さす帰路を急いだ。

家に帰ったら薬草づくりの続きと荷造りをしなくては。

明琳がそんなことを考えながら家路を急いでいると、不意に背後に気配を感じた。

「明琳」

明琳を呼ぶ低くて深みのある声。

もはや今となつては聞きなれたその声に、明琳はゆっくりと振り返った。

明琳の目の前にどこからともなく現れたのは、燃えるような真つ赤な髪、天の光
を纏ったかのように美しい青年だった。

「天翼。久しぶりね」

明琳は男の名をそつと口にする。

天翼は、ほとんど表情を動かさずに言う。

「明琳、そろそろだぞ」

それは幸せだった明琳の日々がもうすぐ終わるという合図だった。

明琳は眉を小さく上げてうなずいた。

「ええ。分かっているわ。王都から今日文が届いたの」

——それにもう、五度目だもの。

明琳は心の中で呟いた。

あの秋の日、明琳は皇后と太子の暗殺未遂の容疑をかけられ処刑された。

それがどういうわけか、目の前の天翼に「やり直したいか」と問われ、彼を契属に
した。その時から、明琳は同じ人生を五度も繰り返し返していた。

「今度こそ炎巫になってみせる」

明琳は天翼の瞳を真正面から見据えると、きつく拳を握りしめた。

天翼はそれを見て眉を微かに上げる。

もう五度もやり直しをしているので、明琳の心も少しは諦めや失望に染まっている
かと思っていた。

だが彼女の瞳に宿った炎は消えるどころか、ますます強くなっているかのように見
える。

その魂の輝きを見るや、天翼は口元を緩めて笑った。

「ああ、期待している」

天翼は短く言うのと、明琳の顔をじつと見つめた。

「何を——」

空の茜色を溶かしたかのような澄んだ瞳。明琳が戸惑っていると、天翼の冷たい指

先が彼女の頬に触れる。

「……泥が付いている」

静かな声が、そっと風に溶けて明琳の耳元に届く。

戸惑う明琳の視線を受け止めながら、天翼は黙ってその泥を拭い取った。

「えっ、うそ」

明琳は慌てて自分の頬に手をやる。

「もう取れた」

天翼はそっけない口調で言うと、指に残った泥を自身の袖で拭った。

五度も人生をやり直し、もう何度も天翼と会っているが、彼が明琳に触れてきたのはこれが初めてだった。

明琳がぼんやりと天翼の顔を見つめていると、天翼は明琳の視線を受け止め、小さく目を細めた。

「……本当に世話が焼けるな、明琳は」

小さく愛おしいものを見るような目で明琳を見つめる天翼。

明琳はなんだか子ども扱いされているような気がして照れくさくなった。

天翼から目をそらし、宙を見つめてそっけなく答える。

「別に泥くらい、なんてことないわよ」

天翼はそんな明琳を見て口元に小さな笑みを作ると、夕日のように真っ赤な袍を翻した。

「それではまた。必要な時は呼ぶように」

「う、うん。ありがと——」

明琳は返事をしようとしたが、天翼の姿はすでにその場から跡形もなく消え去っていた。

天翼が人ならざるものだと分かっているものの、明琳は彼の行動がいつも突然なので戸惑ってしまう。

「もう、いつも突然現れて突然いなくなるのね」

明琳は夕風にそっとつぶやいた。

畑からは湿った土の香りが漂い、遠くからはのどかな牛の鳴き声がしてくる。懐かしい故郷の村の光景。

こうしていると、自分が巫女として都に渡ってからの日々は全て夢だったかのように見える。

自分が都で謂れない罪で処刑されたこと。

死の淵で天翼に出会ったこと。

彼を契属にし、人生をやり直すことにしたこと。

四度の人生で処刑され——今は五回目のやり直しの最中だということも。だけれど、天翼がこうして目の前に現れたのだということは、それは夢ではないのだということの意味していた。

「今回こそ上手くやらないと」

明琳はきつく拳を握りしめた。いよいよ五度目の挑戦の始まりだ。

第二章 巫女、巫宮へ向かう

田んぼの上に朝もやの立ち込める早朝。

鶏の声と犬の遠吠えが響く小さな村に、田舎には不釣り合いな、紅い漆塗りの立派な馬車がやって来た。

明琳は戸口に立ち、粗末な背負い鞆の紐を握り直した。

中には母親が夜通し縫ってくれた替えの衣と、父親が山から摘んできた薬草、村人たちが「道中で食べなさい」と持たせてくれた干し餅が詰まっている。

「これで足りるだろう」

父親が不器用に咳払いをしながら言う。腕を組んでいるが、その表情は心なしか寂しそうだ。

「気をつけるのよ、明琳」

母親は目尻を潤ませ、明琳の肩をぎゅっと抱きしめた。

「ええ……大丈夫。行ってくるわ」

明琳は必死に笑顔を作った。だが胸の奥では、複雑な思いが入り混じっていた。

どうせまた処刑されるのではないか。いや、今度こそ上手くいくはず。そんな思いが波のように交互に明琳の胸へと押し寄せる。

「明琳、いよいよ行くのね」

最後に明琳に声をかけたのは、浅葱色の衣服を身にまとった姉、愛琳^{アイリン}だった。

愛琳は明琳より二歳年上の十八歳。北大陸出身の祖母から受け継いだ金の髪は絹糸のように煌めき、蒼の瞳は海のように深い。

陶器のような白い肌に長く細い手足を持つ愛琳は、町一番の美人と評判だ。

「ええ」

明琳がうなずくと、愛琳は大きな赤い石のついた首飾りを明琳の首にかけてくれた。「今日は明琳にこれをあげようと思って」

「わあ、綺麗。これどうしたの？」

明琳は懐かしい気持ちでいっぱいになり、赤い大きな石をそつと指でつまんだ。そういえばこの首飾りは愛琳に貰ったものだのだと明琳は思い出す。

研磨もされていない赤い何かの原石に、革紐が付けられただけの簡素な首飾り。決して豪華ではないけれど、大好きな姉に貰った明琳の一番の宝物だ。

前の人生では処刑される前に役人に取り上げられてしまったし、その前の人生では川に落としてなくなってしまった。今回の人生では大切にしなくては。

明琳が姉の贈り物を大切に首にかけると、愛琳は開いたばかりの桃の花のように可憐に微笑んだ。

「その石はね、あなたが生まれた日の朝に河原で拾ったの」

「そうなの？」

「ええ。宝物にしようと思ってずっと取っておいたのだけれど、明琳の髪と同じような燃え盛る赤色だし、あなたの方が似合うと思って。想像通りよく似合うわ。綺麗よ、明琳」

愛琳の美しい笑顔に、胸が苦しくなる。

「お姉様こそ綺麗だわ。それ、新しく仕立てた衣装？」

明琳が愛琳の装束を指さすと、彼女は照れたように笑った。

「うふふ、ありがとう。今日は明琳の特別な日だから、お母様に頼んだの」
「そうなの。これなら許嫁^{いんぎすけ}の健良^{ジュンリヤン}も喜ぶんじゃないかしら」

明琳が茶化すと、勢いよく後ろの戸が開いた。

「もう喜んでいるよ」

立っていたのは、色黒の肌に黒い髪、体格のいい好男子だった。

「健良様！」

愛琳は赤く染まった頬に手を当てた。

「もう、来ていたのでしたら言ってくださいな」

「ははは、ごめんごめん。でも君の妹ということは将来の僕の妹でもあるんだ。きちんとお見送りするべきだと思ってさ」

「ええ、そうね」

まるで長年連れ添った夫婦のように仲睦まじく寄り添う二人の様子に、明琳は目を細める。

愛琳の婚約者、陽健良は、隣町の領主の息子で、よく日に焼けた肌に黒い短髪、白い歯が眩しい美男である。

なんでも市場で買いい物をしている愛琳をたまたま見つけて求婚したのだと聞く。なんて素敵なのだろうと明琳はうつとりとしてしまう。でも――。

明琳は以前に天翼に見せてもらった自分の死後の家族の運命を思い出した。明琳が皇后暗殺の容疑で捕えられたせいで、二人は破談となり、姉も両親も犯罪者の身内として大変な苦勞をすることになる。

明琳はきつく拳を握りしめた。くよくよしてなどいられない。

自分はこれから強く生きるのだ。自分が炎巫になって家族の――この国の運命を変えるのだ。明琳は心にそっと誓ったのであった。

「それでは行ってまいります」

明琳が頭を下げると同時に馬車は出発した。

窓の外では、村の子どもたちが眠そうな目をこすりながら手を振っていた。「がんばってね、明琳姐姐！」という声が、澄んだ朝空に吸い込まれていく。

土の匂い、囲炉裏の煙、軒先の干し魚。何度も見慣れた田舎の光景が、この朝はなぜか胸に焼き付いて離れなかった。

東の空には朱色の陽が昇り始めている。

明琳はそつと振り返り、両親と村の人々に深々と頭を下げた。

そして遠ざかりだした故郷に背を向けると、あごに手を当て考える。

明琳は過去四回も人生をやり直し巫女考試に挑んだものの、いずれも失敗し処刑されている。

いつそのこと巫女になるのをやめて村に留まれば、少なくとも処刑をされることは回避できるのではないか。そう考えたこともあったが、天翼が言うには、明琳が炎巫にならなければこの国が減じるらしい。

自分はどうなってもいいが、家族や村の人が被害に遭うのだけはどうしても避けたい。

第一、王宮からの招集を断るなど小さな村の下級役人の娘には不可能だ。

となると、とりあえず都に出て巫宮に行かなくてはいいけないことは確実なのだ

が——問題はその後だ。

わずか十六歳の少女に処刑の運命を回避して国を救えというのは、どうにも荷が重い。

明琳は小さくため息をついた。

どうすれば自分は炎巫になれるのだろう。

考えても考えても分からず、いつしか明琳は馬車の揺れに合わせるように、こくりこくりと眠りに落ちていた。

そして——しばらく馬車は明琳を乗せて道なき道を走り、午後になるころには明琳を乗せた馬車が、王都の夏京^{シヤジン}へと続く大きな朱門をくぐりぬけた。

明琳ははっと目を覚ますと窓の外の景色を見た。

明琳の生まれ育った田舎とは異なり、夏京は碁盤の目のように区画整備された街だ。皇城へと続く黄色く焼けた大通りには、飯店や乾物屋、肉屋に魚屋と店がずらりと並び、商人たちで溢れている。

赤や黄色にはためく色とりどりの織物や絹。香辛料や果物、香の香りの中、馬車は蹄を鳴らし巫女たちの住まう宮殿、巫宮^{みくう}へと向かった。

「いよいよ五度目の都ね」

明琳は複雑な思いで人々がひしめく都を見つめた。

明琳としては、ただ誰に向けてでもなく一人呟いたつもりだったが、思いがけず返事があった。

「そうだな」

天翼が音もなく現れ、明琳の目の前の席にふわりと腰かけたのだ。

天翼が神出鬼没だとは知っていたが、まさか馬車の中に現れるとは思ってもみなかった。前までの人生でも一度としてなかったことである。明琳は少し驚いてしまふ。

「ねえ天翼、これからどうすれば私は炎巫になれるの」

明琳が声を潜めて尋ねると、天翼はゆるやかに首を横に振った。

「分からない。何度も言っている通り、私にできるのは時間を巻き戻すことだけだ。どうすればいいかは分からない。それはお前が考える他ない」

「そう……よね」

明琳は俯き、胸の前でぎゅっと荷物の紐を握りしめた。心臓の鼓動がやけに大きく響く。

未来が見えない暗闇の中で、ひとり小舟に揺られているような心細さが明琳を襲う。不安が表情に出ていたのか、天翼が不意に口を開いた。

「辛いのだったらやめてもよいのだぞ」

その言葉に、明琳は驚き目を見開いた。五度のやり直し人生の中で、天翼が「やめ

「でもない」などと口にしたのは初めてだったからだ。

「ううん、大丈夫」

明琳は慌てて顔を上げ、笑顔を作った。震える頬が引きつっているのを自分でも感じる。

「本当か？」

天翼の澄んだ朝焼けのような瞳が、まっすぐに明琳を射抜いた。

「私はこの国のことを案じているが……明琳、お前のことも心配に思っている。少し無理をしすぎではないか」

その瞳を見て、明琳は悟った。——この人は本気で私の身を思ってくれている。

確かに五度にわたるやり直して、明琳の精神は極限まで削られていた。毎回やり直しの際に体の傷は治るが、処刑の際の恐怖や、胸を抉られるような絶望感まで癒えるわけではない。それでも——。

自分が炎巫にならなくては国が乱れる。家族も、友も、無惨な目に遭う。

それだけは絶対に避けなければならない。

明琳は心配をかけまいと、努めて明るい笑顔を浮かべた。

「ありがとう、天翼。でも私なら大丈夫。まだ頑張れるわ」

「そうか」

天翼はわずかに目を伏せ、何かを囁みしめるように沈黙した。やがて、静かな声で告げる。

「だがくれぐれも無理はしないように。覚えておいてほしい。お前は一人ではない。

私はいつでもお前の味方だ」

「ありがとう、天翼。嬉しいわ」

明琳は胸に熱いものが広がるのを感じながら、そっと拳を握りしめてうなずいた。「それでは私はこれで」

だが次の瞬間には、すでに天翼の姿は春の風に溶けるようにかき消えていた。

それからしばらくして、明琳を乗せた馬車は土埃を高く上げながら、ぎしりと音を立てて停車した。

「お客さん、着きましたよ」

御者が馬車の扉を開けてくれる。

「ありがとうございます」

明琳が頭を下げると、御者は不思議そうな顔をした。

「あれっ、君一人なの。今誰かと喋っていなかったかい」

ぎくりと明琳の心臓が変な音を立てる。

「き、気のせいじゃないですか。あははは」

明琳は笑って誤魔化した。

（もう、いつも急にどこかへ行ってしまうのだから）

明琳は心の中で毒づいた。

「この辺は道が入り組んでいるから気をつけて」

御者は馬車を降りる明琳に手を貸すと、心配そうに眉を下げた。

「はい、ありがとうございます」

明琳は御者に頭を下げると巫宮へと急いだ。

御者の言う通り、この辺りは道が複雑に入り組んでいる。

そのせいで一度目の時は道に迷ってしまい、初日から遅刻をしてしまうという失態も犯した。

けれど今の明琳にとっては五度も通った見慣れた道である。今生では迷わずに巫宮に到着することができた。

「少し早く着きすぎたかしら」

明琳はきよろきよろと辺りを見回した。

赤い漆塗りの柱に、大量の書類を抱え、走り回る人たち。ここ巫宮は、宮廷に仕える巫女たちの住まう場所だ。

巫宮に住まう巫女たちは、ここで主に二つの仕事を行うこととなる。

一つは、皇帝陛下や後宮に住まう女性たち、役人相手に占いをすること。

そしてもう一つは国の疫病や妖魔を払ったり、雨乞いをしたりすること。

そんな巫女たちの中でも炎巫と呼ばれる最高位の巫女だけが許されている業務がある。それが、国の政治に関する占いをして皇帝陛下に助言をすることだ。

つまり炎巫になれば国を動かせる。

国の歴史書にも、皇帝と炎巫は二つで一つ。車輪のようなものだと書かれている。どちら一つが欠けてもこの国は上手く回らないからだ。

「政は炎帝^{まつり}、祀は炎巫^{まつり}」という言葉もあるほどで、炎巫は皇帝に匹敵するほどの重要な役職とも言えるのだ。

「はあ」

明琳は柱の陰でそっと息を吐いた。

いくら人生五回目だからといって、そう簡単に炎巫になれるものなのだろうか。

明琳が不安に思っていると、臙脂色^{えんじ}の服を着た官吏がやってきた。

「新しく来た巫女の方ですね。こちらへどうぞ」

官吏に声をかけられ、明琳ははっと顔を上げる。

「はい。ありがとうございます」

官吏に促され、巫宮の奥へと進む。

(そうだったわね)

明琳は徐々に前回までの人生の記憶を思い出す。

巫宮に来たからには、まずは巫女たちを束ねる長、巫長に挨拶するのが習わしだ。明琳は巫宮の一番奥、巫長の部屋へと急いだ。

「こんにちは。遠いところから遥々よくいらつしやいました」

紺色の巫女服を着た、黒髪の女性に出迎えられる。

かつて炎巫の右腕として働いていた、巫長の陽文芬^{ヤンフンフェン}。炎巫不在の今、ここ巫宮で一番の権力者だ。

この人のもとで、全国各地から集められた炎巫候補生たちは、ここで巫女生活を送ることになる。

本来ならば、新しい炎巫は前の炎巫の指名で決定するのだけれど、今回は、前の炎巫が次の炎巫を指名しないまま亡くなってしまった。

そこで国中から条件に合う巫女候補が集められ、最終的に誰が炎巫になるかは、ここにいる巫長の判断に委ねられることとなっている。

(今回こそは絶対に炎巫に選んでもらわないと)

明琳はお腹のあたりに力を込め、気合を入れると勢いよく頭を下げた。

「こんにちは。紅明琳です。これからよろしくお願いいたします！」

明琳の挨拶に、巫長は顔を上げ、にこりと笑った。

「業務は明日から教えますので、今日はゆっくり休んで荷物の整理等してくださいね」

「はい、ありがとうございます」

いよいよ五度目の巫女人生の始まりだ。

一度目の時は遅刻をしてしまったため巫長の印象も悪かったかもしれないが、今回は遅れてないのでそこまで悪印象は与えていないはずだ。

故郷でも雨乞いや妖魔の討伐で十分に巫女としての名は上げてあるし、後は試験で好成绩を収めて、巫長の印象を上げておけば完璧だろう。

巫長に挨拶を済ませたあと、明琳は官吏に案内され自分の居室へと向かった。

国中から集められた炎巫候補の少女たちは巫房と呼ばれる棟で共同生活を送りながら試験を受けることとなる。

巫房には四人部屋が五つあり、風呂や廁所^{かわや}は共同。

明琳は慣れた足取りで自分の部屋へと向かうと、二人分の寝台と机を広く使い荷物の整理を始めた。

部屋は四人部屋だが、二人の候補者が辞退してしまい実際には二人部屋になることを明琳は知っていた。

「これでよしと」

明琳は荷物を慣れた位置に収めると、さっそく巫宮の奥にある図書房へと向かった。ここにはこの国の歴史や占星術、植物学や鉱物学まで、ありとあらゆることに關する書が収められている。

その上、宮廷に仕える人間であれば、料金を払うことなく書庫の書物が全て自由に借りられる。もちろん巫女もその対象だ。

明琳は抱えきれないほどの書物を手に図書房を出た。

明琳が図書房の存在を知ったのは三度目のやり直しの最中だった。

元々本好きであるし、四度目のやり直しでは図書房の書物を利用したおかげもあり筆記考試では首席も取れた。

そう言った経緯もあり、今回の人生でも、明琳は荷物を置くと真っ先に図書房へと向かったのであった。

「よいしょ。少し借りすぎたかしら」

明琳が書物を借り図書房から戻ると、部屋の前に一人の小柄な少女の姿が見えた。部屋の前を自信なげに往復する赤いおさげ髪。その兎のような丸い目の幼顔には見覚えがあった。

「こんにちは。もしかして、同室の方ですか」

明琳が声をかけると、おさげの少女は小さな肩を小鹿のように震わせ、振り返った。「あの、私、雨^{ユイ}梅^{メイ}と申します。お散歩が趣味で、その辺をウロウロしているうちに迷ってしまった……もしかして同じ巫女候補の方ですか？」

梅梅は明琳より一つ歳下の十五歳で、明琳と同じく炎巫候補である。

梅梅は毎回やり直しの度に明琳と同じ部屋になるのだが、どうやら今回も同室となる運命は変わらないらしい。

梅梅は一度目から四度目までの人生いずれも中間考試で脱落していなくなってしまう。

だがそれまではこの部屋で一緒に暮らす仲間だ。仲よくしておくに越したことはない。

「私は紅明琳。梅梅……さんとは同じ部屋なの。よろしくね」

「は、はいっ。よろしくお願いします」

梅梅はおさげ髪をふるわせ、ぴよこんと頭を下げる。

「よいしょ」

明琳が勢いよく机に書物を置くと、梅梅は目を丸くした。

「明琳、それはどうしたのですか？」

明琳の借りてきた大量の書物を指差す梅梅。

明琳は、別に悪いことをしたわけでもないのに、なんとなくばつの悪い気持ちになった。

「ああ。これ図書房から借りてきたの。ほら、私、田舎から出てきたし、他の人より勉強しないと追いつけないと思って」

明琳が早口に説明をすると、梅梅は感動したような目で明琳を見やる。

「ええっ、すごいです。さすがは全国から集められた巫女候補。意識が高いんですね。私なんて親に言われるがまま、流されるようにここに来ましたのに」

「そ、そうかしら」

明琳は頭をかいて横を向いた。

（弱ったな。別に私はそんなに凄いわけではないのに）

明琳自身、一度目の人生の時は特に目的もなくここに来ていた。むしろそういった人の方が大多数だろうと思う。

けれど明琳にはそう言うてはいられない事情がある。

何せ人生五度目。天翼に何度やり直しをさせる力があるか分からないけれど、ひよっとしたらこれで生まれ直しも最後かもしれない。何としてでも炎巫にならなくては。

「別に大したことないわよ」

明琳は苦笑いをして机に向かうと、占星術の本を開いた。

そして巫宮に入ったその日から、明琳の猛勉強は始まった。

炎巫候補生になる条件は三つある。

一、十代の少女であること。

二、髪が赤いこと。

三、巫力みりきと呼ばれる予知能力や透視能力、火を操る能力を持つこと。

そしてこの三つの条件に当てはまる十八人の少女は炎巫候補として宮殿に呼ばれ、半年の選考期間の間に二度の考試を受けることとなる。

まず巫宮に入ってから三か月後に中間考試があり、その結果で十八人いた炎巫候補生が九人に絞られる。そのさらに三か月後には、最終考試で一人の炎巫が選ばれる。

炎巫は巫長の占いで決定されるため、必ずしも成績上位者が炎巫に選ばれるとも限らない。

実際前回のやり直しでも考試で首席になったにもかかわらず、明琳は炎巫に選ばれず処刑されている。

けれども成績が悪ければ中間考試で落ちてしまう可能性もあるので、勉強しておくに越したことはない。

明琳が机に向かい歴史書の中身を頭に叩き込んでいると、不意に梅梅の声がした。

「んー、取れない」

その声を聞いた瞬間、前回の人生での光景が明琳の頭に蘇ってきた。

梅梅は地震によって崩れた棚のせいで手を怪我してしまう。

それで勉強にも後れ^{おく}を取って、梅梅は最初の考試に落ちてしまうのだ。

明琳が慌てて梅梅のほうを振り返ると、ぐらぐらと地面が揺れ、目の前の棚がゆっくりとこちらへ倒れてくる。

「危ないっ」

明琳は慌てて梅梅に抱きつくと、そのまま横に転がった。

先程まで梅梅がいた場所に棚が倒れてきて、大きな音を立てる。

明琳と梅梅はというと、盛大な音を立てて床に転がったものの、大した怪我はないようだ。

「大丈夫？ 怪我はない？」

「はい、ありがとうございます」

明琳の問いに、梅梅は頭を下げる。

（よかった。今度の生では怪我をしなかったのね）

明琳はほっと胸を撫でおろす。

どうやら五度目の人生で初めて梅梅の怪我を回避することができたようだ。

自分の運命には直接関係ないとしても、やはり人が怪我するのは見ていい気持ちにするものではない。この調子で処刑の運命も回避して、絶対に炎巫にならなくては。

明琳がほっと胸を撫で下ろしていると、急に部屋の前が開き、一人の少女が入ってきた。

「あなたたち、何を騒いでいるの」

巫女たちの中でもひときわ背の高いこの少女の名前は緋静^{ヒジン}。白磁のような美しい肌につつく結い上げた赤髪。切れ長の目元には感情の起伏がなく、ただ冷たく人を見下ろすような視線だけがある。

左の目尻には一粒の泣きぼくろがあり、それが彼女の冷酷さの中に、どこか妖艶さを添えていた。

静は前回の生——いや、一度目から四度目の人生すべてで炎巫に選ばれている優秀な巫女だ。

明琳はぐくりとつばを飲み込むと、笑顔を作った。

「ごめんなさい、地震で棚が倒れてきて」

明琳が答えると、静は小さく舌打ちをした。

「あのねえ、地震なんてこの辺じゃよくあることでしょ。それをそんなにどたばたと

騒がないでよね」

「ご、ごめんなさい」

「ふん、これだから田舎者は。私たちは炎巫候補として選ばれし巫女、そこいらの凡人とは違うのよ。これしきで焦らないでちょうだい」

「ええ、これからは大人しくするわ」

明琳と梅梅が頭を下げると、静はふんと鼻を鳴らして背を向ける。

「ま、せいぜい気をつけてよね」

部屋から去ろうとする静を、明琳は慌てて呼び止めた。

「あ、待って」

「何かしら」

眉間に皺を寄せて振り返る静。

明琳は口角を引き上げ、できる限り柔らかい口調で言った。

「私、紅明琳。あなた、緋静さんよね？」

「ええ、そうだけど」

素っ気なく返事をする静。

明琳は続ける。

「せっかく隣の部屋同士になったのだから、私たち仲よくしたほうがいいわ。ねえ、

静さんはどこ出身なの？」

明琳の言葉に、静はふんと鼻で笑った。

「私は仲よしごっこをするためにここに来ているわけではないわ。私には炎巫になるという使命があるの。それじゃ」

大きな音を立てて戸が閉まる。

静と仲よくなることで前の生と違う展開に持っていこうとした明琳だったが、どうやらそれは失敗に終わったようだ。

（静と親しくなれば、もう少し情報を集められると思っていたのに）

明琳がぼりぼりと頭をかいていると、梅梅が頬を膨らませた。

「何あれ感じ悪いです」

「しょうがないわ。静の意見のほうが正しいのだから。私たちは炎巫の座を巡って争う者同士。仲良くする必要がないという人もいて当然よ」

明琳が平然とした顔で椅子に座ると、梅梅は下を向いた。

「明琳は大人ですね」

「そうかしら」

「私はもし自分が炎巫になれなかったら、静みたいな人よりも明琳に炎巫になってほしいです。気も合うし、初めて会った気がしないです！」

「ありがとう」

明琳は苦笑した。

（初めて会った気がしない……かあ）

確かに二人が会うのは初めてではない。明琳と梅梅は過去の人生でもう何回も出会っているのだから。

「ありがとう。そう言ってもらえて嬉しいわ」

明琳は梅梅にそう返事をする、自分の机に戻った。

そして必死に勉強や占いの精度向上に励み、三か月の後、中間考試の結果が貼り出された。

廊下に貼られた順位を指さし、梅梅が目丸くする。

「わあ、明琳、首席ですね。すごいです！」

考試の結果、明琳の成績は前回の人生に引き続き首席だった。

さすがに人生五度目ともなると考試の内容もほとんど丸暗記してしまっているのが当然と言えば当然だ。今回は梅梅に勉強を教える余裕すらあったほどだ。

明琳は梅梅に微笑んだ。

「ありがとう。勉強したからね」

明琳は横目でそっと静を見た。

静は青い顔で唇を噛み締めずと下を向いている。

「わっ、私の名前もありました。奇跡です！」

梅梅がおさげをぴよこさせながら飛び跳ねる。

それまでの人生では中間考試で脱落した梅梅も、今回は明琳が勉強を教える余裕があったおかげか九人の候補の中の一人に残っていた。

「また一緒に頑張りましょうね」

「はい、頑張りましょう！」

明琳と梅梅は二人で抱き合い、笑みを交わした。

だけれど明琳の心には、言い知れぬ不安が纏わりついていた。

本当にこのままでよいのだろうか。このまま巫女考試を受けていては、いつもと同じ人生になるのではないか？

明琳の脳裏に、前回の——四度目のやり直しの際の記憶が蘇ってきた。

前回、明琳は筆記試験で初めて静に勝ち首席になり、さらには予言的中率でもほぼ満点に近い点数をとった。

だがそれにもかかわらず、炎巫に選ばれたのは、首席の明琳ではなく次席の静だった。

明琳はその時のことを思い出し、ぎりと奥歯を噛みしめた。

それまでは勉強をして考試で静に勝てば炎巫になれると思っていた。だけれど、二つの試験で首席だったにもかかわらず選ばれないとなると、一体どうしたらよいのだろう。

事態を開關するためにはいつもと違うことをしなくてはいけない。何か思い切った行動をする必要がある。

薄々ではあるが、明琳はそう感じ始めていた。

だがいつもと違うこととは何なのだろう。その「何か」が、明琳にはどうしても分からなかった。

明琳は午後の鍛錬が終わると、しばらくの間、机に向かい考えこんだ。

だが、いくら机に向かって考え込んでいてもいい案が出るわけでもない。

明琳は椅子から立ち上がると、新鮮な空気を吸いに外に出ることにした。

巫房の外はすでに夜の気配が忍び寄っていた。季節は春だが、腕に当たる風は冬のように冷たい。頭上には、淡い光を放つ三日月がひっそりと浮かんていた。

明琳が腕に冷たい空気を感じながら廊下を歩いていると、いつの間にか巫長の部屋の辺りまで歩いてきたことに気がついた。

（そうだわ、いっそのこと思い切ってこれから巫長を食事にも誘ってみようかしら）

明琳はふとそんなことを考えた。

前回までの人生では考試でいい点を取ることばかり考えていたけれど、よく考えてみたらもっと巫長にいい印象を与える努力も必要かもしれない。

そんなことを考えながら巫長の部屋の戸を叩こうとした明琳は、ふと聞きなれない男性の話し声が聞こえてきて慌てて手を止めた。

こんな時間に男性が巫長に何の用だろうと明琳が耳を澄ませていると、中から巫長の話し声が聞こえてきた。

「分かっていますよ。必ずや静を炎巫に」

その言葉を聞いた瞬間、明琳は目の前が真っ暗になり、ぐらぐらと足元の地面が崩れ落ちるような気分になった。

今のは――巫長が何者かに静を炎巫にするようにと約束していた？

それは明琳にとっては受け入れがたい、だが本当ならばすべての辻褄が合う事実であった。

本来ならば、新しい炎巫は先代の炎巫が占って決める決まりである。

だが、今回は先代の炎巫が後継者を指名する前に亡くなってしまい、代わりに決めるのは巫長だ。

その巫長が何者かと結託していたのであれば、これまでいくら自分が頑張っても炎

巫に選ばれなかったのは当然だ。

それだけではない。明琳は毎回、皇后の暗殺未遂の容疑で処刑されている。

そこで冤罪対策として、皇后に占いを依頼された際には毎回前回襲われた場所と違う場所に行くように助言してきた。だが、それでも皇后はなぜか毎回何者かに襲われ続けた。

だがそれも巫長による謀略だったのだと思えばすべて納得がいく。

思えば、皇后を占うようにと明琳に勧めるのはいつも巫長だった。それに加え、毎回のよう皇后の占いが終わった時、巫長は部屋のすぐ外にいた。前回もそうだ。

巫長ならば占いの結果を聞くことができる。皇后の行き先がどこであれ妖魔に襲わせ、明琳に罪を被せることができる。やはり巫長が全てを仕組んでいたのだろう。

明琳はそつと廊下の角に身を隠し、巫長と話していた何者かの正体を見てやろうと張り込んだ。

しばらくして、巫長の部屋の戸が開いた。

中から出てきたのは、豪華な身なりで、恰幅のいい中年男性だった。

明琳にはその人物に見覚えがあった。何度か政策の相談をしに巫宮を訪れていたのを見かけたことがある。

(あれは――丞相様?)

丞相といえば、皇帝を補佐する役目を負った最高位の大臣で、皇帝に次ぐ地位の持ち主だ。

しかも本人だけでなく、その娘の西妃さいひも皇帝の妃として後宮入りし、皇后に次ぐ地位を得ている。まさに今、宮廷内外で最も影響力を持つ権力者と言えよう。

現在は皇后の子の誠太子が次の皇帝とされているが、皇后と太子に何かあればまだ幼い西妃の息子が次の皇帝候補となる。そうすれば丞相は皇帝の祖父としてさらなる権力をふるうことができる。

そして炎巫も彼の息のかかった者になることで政と祀の両輪を手に行うことができる。

(そんな……そんなことって)

明琳はふらふらと部屋に戻ると、頭を抱え、椅子に座りこんだ。

(巫長と丞相が結託していた……?)

明琳はじつと眉根を寄せて考えた。考えれば考えるほど、丞相と巫長のたくらみにめまいがするような思いになった。

道理で明琳がいくら巫宮で頑張ろうとも炎巫になれないはずだ。丞相と巫長が結託して静を炎巫にしようとしているのだから。

「うーん」

明琳は帳面に今分かつている事柄を書き出し、じっと見つめて考えこんだ。二人が結託しているのは確かだとは思うが、情報があまりにも少なく、今のままで動きようがないし、分らないことが多すぎる。

ここから運命を大きく変えるには、事の真相を探る必要がある。

明琳はその日から、巫長と丞相についての情報を集め始めた。

巫長の陽文芬は今年で四十二歳。結婚はしておらず独身。

十代のころは、女官として後宮に勤めていたが、後宮で彼女の占いや雨乞いの能力が話題となり、後に巫力の強さを見込まれ巫宮入りしたのだという。

赤髪ではなく黒髪なので炎巫候補にはならなかったが、その巫力の強さや占いの的中率、雨乞いの精度を見込まれ巫長にまで上り詰めた実力者だ。

丞相と恋仲であるという噂も一部の者にはもうすでに知られているものの、物的証拠は何もない。

そして静にいたっては地方出身者ということもあり、巫長や丞相とのつながりを示す証拠は何も得られなかった。

(結局、二人のたくらみについては何の情報も得られないわね……)

明琳が途方に暮れていると一人の女官が声をかけてきた。

「あら、明琳さん」

「^{ケイシン}にこやかに手を挙げてこちらにやって来たのは、後宮で女官として働く若い女性・桂杏だった。

彼女は明琳が巫宮に来てからというものの毎週のように占いのために巫宮を訪れており、親しい仲となっていた。

「ここに来るのは久しぶりですね」

明琳が声をかけると、桂杏は憂鬱そうな顔をして息を吐いた。

「ええ。最近女官が一人辞めてしまつて忙しいの」

「そうなのですか？」

「ええ。佳蓉^{カミヨウ}様付きの教育係だったから直接の業務には影響はないのだけれど、辞めたのは新人だったらしくて、その子の雑務がこっちにも回ってきちゃつて」

佳蓉といえば、皇后の娘——公主の名前だ。

「そうだったのですね」

「近々、後任を選ぶ考試を行うらしいけれど、早く決まっていほしいわ」
ため息をつく桂杏。

明琳はいつものように桂杏の運勢を占うと、自室へと戻った。

桂杏は丞相の娘である西妃付きの女官である。彼女から何か丞相に関する情報を得られないかと思っていたが――。